

草津市立矢倉小学校通信 平成30年7月2 NO.6



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## ほどよい、適切なかわりを

3年生の社会科見学で、山田の野菜流通センターとセンターの周りがあるビニルハウスを訪問したときのこと、メロンやトマトを甘くおいしく育てるには、水やりをしないことだと説明を受けた。もともと熱帯地方の乾燥した土地で生育していたから、メロンやトマトにとっては、水やりをしてもらわない方が心地よいのかも知れない。だから、農家の方々はこれを生かし、厳しく育てれば、強くたくましく、味わい深く育てることができるという。かわいそうだからと、水をやると水っぽくなるというからおもしろい。なんだか子育てに通じるものがあるように思えてきて、感心しながら話を聞かせてもらった。もちろん、水やりをしなくてよいからといって、農家の方は全くの放任を決め込んでいるというのでもない。随分前から土づくりに精を出し、苗の植え付けが終われば、枝の剪定、実のつき具合、病害虫のことなど、メロンやトマトの生育環境、「生きる意思」のようなものを踏まえ、ずっと目を離さず、心を寄せて世話をされているのだ。

いわゆる青少年問題、子育て問題にかかわる仕事をされている方の話に、子どもは大切に思う身近な人から「真に愛された」と感じるのは、自分の意思を大切にされたときであり、それが満たされないとき、せめて見せかけの愛でもいいから、自分に関心を持って欲しいと願うものだというのがあった。

子どもの問題行動は、ほとんどの場合、大人の関心が子どもにほどよく届かず、子どもの気持ちが置き去りにされたり、意思を無視されたりすることに原因があるという。逆に過保護の子育ては、子どもは自己の意思を発揮しないですんでしまう。放任となれば、子どもの意思は関心をもたれない。いずれも子どもの「生きる意思」が尊重されないため、子どもは心から満たされた感じを味わえていないことになる。

メロンやトマトに、人と同じような心があるわけではもちろんない。しかしながら、ほどよい適切な関わりが、持ち味を力強くし、より濃いものに育て上げていくと言えそうだ。

校長 大林 道範